

とんでもない勘違いで、この記事は投票日前に出るものと思ってたら、投票日の後ということに気づいて、慌てて朱を入れている。

さて、ボクの友人が泉州で選挙に立候補しているが、この記事が目につけられる頃には、代議士になっているはずだ。彼は、坂本龍馬の船中八策になぞらえて「泉州八策」と題して政策を訴えているが、龍馬が生きた時代を彷彿させる変革期に、船中ならぬ泉州で策を案ずる姿を想像させるところに、友人の思慮を見て、いかにも心地よい。片や、ボク達より20歳ほど年の離れた橋下知事は、まことに交渉上手で、実にわかりやすい。でも、わかりやすい分、危うい。「国と地方の協議の場」の法制化を分権の「踏絵」にして、見事政党を手玉に取って見せたから、さすがだ。でも、かえって、橋下さんが、国との税金のぶんどり合戦の一方の若大将に見えてしまって、何だか萎えてしまったのは、ボクのある種のひがみも入っているからだろうか。ボクには、橋下さんが、「彼が本気で霞ヶ関と闘う気があるのか聞いてみる」と府庁を訪ね、格の違いを見せた小沢一郎さんに主役の座をとられてしまったように見

えた。ボクは、橋下さんには悪いが、小沢さんという政治家の格の違いと、そして、ボクの友人の思慮の深さに、政権交代の前夜を感じた。

ボクの友人は、八策の四策に、120万本の植林を活かして泉州に林業を興す、五策に、関西3空港を経営統合する、七策には、総合評価入札で障がい者雇用を100倍にするなどと提唱している。ボクは、ずっと昔から知っているから、一字一句、レイアウトまで自分でやる友人の手工業ぶりを思い浮かべた。かつては、ボクはもっとチームプレーをと生意気な忠告もしたことがあるが、いまになって、彼の手工業こそが、政権交代直後の政治家の資質だと見直している。ホントに楽しみだ、彼の知と企が、永田町で踊るのを見るのが。その時、ボクは、彼にいっぱい投げかけたいテーマがある。都市の生活保護の住宅扶助を積立金方式にし、福祉とまちづくりを共感させる、とか。公共の発注物件で、地域に2千のソーシャル・ファームを興す、とかだ。ボクの「西成八策」だ。日本中で八策が企てられ、論じられる。政権交代、ポスト霞ヶ関、この夏、日本人は一度剥けて、秋を迎える。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



暑い夏、「船中八策」で涼を採る

# 二つ逸曲

アナログレコードの逆襲その27 ぶるっす  
 デイランII / プカプカ (みなみの不演不唱)  
 アルバム「きのこの思い出に別れをつげるんだもの」から



近年、鬼籍に入るミュージシャンたちが多い。これからも僕らの青き時代の言葉や代弁してくれた、彼らへの鎮魂を持ち続けたいと思う。最近では忌野清志郎、数年前に高田渡が逝った。4、5年前になるだろうかナターシャ・セブンの坂庭しようごも彼岸に旅立ち、同じ頃、西岡恭蔵がすでに亡くなっていたことも知らされた。

あの時代からとても遠くへ、そして戻れない旅をしてきたものだと思う。その途上で別れを告げゆく有名無名のミュージシャンたち。それは同時代の「友

人」たちであった。

西岡恭蔵は、大塚まさじ(リーダー)、永井ようらと組んだフォークグループ『デイランII』のメンバーだ。70年のころ、浪速区に『デイラン』というライブ喫茶を経営し、そこで演奏をしているという噂を聞き、その店を探しに出かけたことがあった。しかし発見できなかった。今のようにネット検索やタウン情報などがのぞめない時代で、店が閉店したため『デイラン』でのライブを遂に見ることが出来なかった。

アルバムB面最後に挿入された「サーカスにピエロが」という曲の中で歌われるフレーズ「きのこの思い出に別れをつげるんだもの」がこのアルバムタイトルになった。アルバムのコンセプトは、過ぎ去った時代の悔恨や内省を、多くはスロウなバラッドやシュールな歌曲で歌われ、まさに「きのこの思い出に別れをつげる」テーマとなっている。

「同時代のフォークにありがちなエキセントリックさや甘さが無く、むしろゆるいクールさと大人っぽい姿勢が新鮮」とは今回久方ぶりにお皿を回した印象

である。そんな中で「男らしいってわかるかい」という曲がA面最後に入れられ、これはB・デイランの「I SHALL BE RELEASED」をカバーしたもので、「変わることが無いよ」としながら「でもオレをこんなに変えてくれた友がいる」と、明らかにデイランへの敬愛を歌った曲であるのが僕にはわかった。それにもまして、B面はじめ、西岡が作詞した「プカプカ」は、このアルバムの中でも異色・出色のブルースとなっている。

「俺のあん娘はタバコが好きで、いつもプカプカプカ 身体に悪いからやめなかっていっても、いつもプカプカプカ 遠い空から降ってくるって言う、幸せってやつがあたいにわかるまで、あたいたバコをやめないわ、プカプカプカ」コミカルで全体にシュール感が漂う印象の曲だが、いまや大衆消費材としての音楽現況にあって、この曲はいまだ色あせず、和製ブルースの先陣を切った曲として忘れられない。